volume
73
SEPTEMBER
2000

HABATAKI

はばたき

UNIVERSITY OF SHIZUOKA

52-1 YaDa, Shizuoka-shi Shizuoka-Ken 422-8526 Japan

inside NEWS

大学概要説明会開催

本学への入学希望者を対象とし、学部の説明や施設見学を行う大学概要説明会が8月2日、3日に開催された。説明会は各学部ごとに開かれ、薬学部、食品栄養科学部、看護学部が8月2日、国際関係学部、経営情報学部が8月3日に実施。参加者は2日間で合計1700名を超え、県外からも約300名が参加した。

参加者は入学を希望する学部ごとに大講堂、看護学部棟大講義室に集合し、学部長等から学部、学科で何を学ぶのか、学部の特徴などの説明を受けた後、教員や学生の案内でグループごとに分れて学内を見学した。

学内見学では、研究室や実験室の見学、研究内容の説明、図書館の見学、LL教室での模擬授業、コンピュータ実習室での機器操作、在学生との懇談会などが行われた。

また、学生部に個別相談コーナーも設けられ、参加者は入試や、学生生活、留学などについて熱心に相談していた。

夏休みファーマカレッジ2000「新しいくすりへの挑戦」

本学薬学部では、県内の高校生を対象とした「夏休みファーマカレッジ2000～新しいくすりへの挑戦」を、8月3日、4日の2日間に開催した。ファーマカレッジは、高校生が大学の研究者から直接指導を受け、実験や実習を行う中で、科学的なものの見方を養い、科学に接する喜びを体験することにより、科学に対する興味や理解を深め、将来の夢や希望を育てることを目的としている。

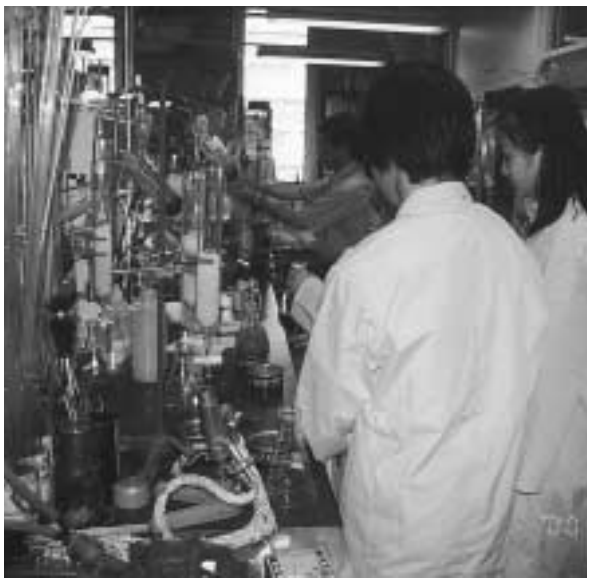
薬がどのような過程でつくられるのか、薬の効用はどのような方法で調べられるのか、薬はどのような形で利用するのが最も有効であるのか、健康な身体と病気になったときとどこが違うのか、等の課題を設定し、さらに人間の身体を構成している細胞の働きを含めて化学、生物学、物理学、分子生物学的手法で現在医薬品開発に関係する最新の技術に触れられるよう実験、実習がおこなわれた。

6月中旬から行われた参加者募集に対して71名が応募、書類選考により33名の参加者が決定した。

第1日目には、廣部学長の講義があり、学長の実験を交えた講義に参加者は興味深く、聞き入っていた。その後参加者は4名～5名の8グループに分れ、課題ごとに各研究室で説明を受け、研究に取り組んだ。

学長講義

学長講義



研究室での実験

3日目の午後までの研究中、高校生たちは、実験器具を使用した分析、ラットを使用した実験、細胞培養、コンピュータを利用したCGの作成、核磁気共鳴装置での分析、液体クロマトグラフィーを使用した分析等を体験した。

研究終了後、各グループごとにOHPを使用し、研究内容の発表を行った。参加した高校生たちは、高校では体験できない分析機器を使用した実験や、ラットを使用した実験により薬学への興味を深め、薬学のおもしろさ、奥深さを感じ、今後の勉強に生かしたいと感想を述べていた。

参加者と指導した先生

研究室での実験

研究内容の発表

ラットを使った実験

食品栄養科学部の動き

食品栄養科学部長　竹石桂一

食品栄養科学部は昭和62年4月に開設以来14年目を迎え、本年3月には10回目の卒業生を世に送り出しました。卒業生が「食と健康」に関連した分野を始めとして様々な分野で活躍していることを見聞きするにつけ、本学部の出身者が社会に広く、また深く根を下ろしつつあることを実感しております。

平成11年度から、「はばたき寄金」による各学部各学科の成績優良卒業生に“はばたき賞”が授与されることになりましたが、本学部の食品学科では藤田理英子さんが、栄養学科では杉山景子さんが受賞しました。また、卒業時に各栄養士養成施設において栄養士課程専門科目の成績優秀者に対する全国栄養士養成施設協会長による表彰が行われますが、本学部栄養学科の平成11年度表彰者には八木絵里子さんが選ばれました。

食品栄養科学部・同専攻の教員数は、本年4月1日現在、学部本務教員35名（教授12名、助教授6名、助手17名；このうち32名が研究科兼務）と、大学院生活健康科学研究科食品栄養科学専攻の大学院専任教員（学部兼務）8名（教授3名、助教授1名、助手4名）です。昨年度末から今年度にかけては全く教員の移動はありませんでしたが、学部担当の学務主幹が風間康氏から仁科正昭氏に交代しました。一方、本学部の学生数（平成12年4月現在）は1年生から4年生まで合計で239名ですが、そのうち男子学生は1割強の30名です。もう少しバランスのとれた男女比になってほしいと思っています。

短期大学部浜松校は平成13年3月をもって閉校することになっていますが、それに伴って、来年4月より教授2名、助教授2名、助手1名の合計5名が本学部に移行する予定です。この移行によって、本学部は一層充実するものと期待しておりますが、現在の学部棟にはこの移行教員を受け入れるスペースがないどころか、すでに一部人と物が溢れている状況にありますので、それを踏まえて地上3階建ての新棟が増築されることになっています。本年9月上旬に着工し、平成13年10月に完成の予定です。また、短大部浜松校からの教員の移行と次に述べる管理栄養士認可申請に伴って必要なカリキュラムの改訂作業を現在進めています。

当学部の栄養学科は、厚生省から栄養士養成施設としての指定を受けていますので、現在は所定の単位を修めれば卒業と共に栄養士免許を取得でき、管理栄養士の国家試験受験資格が与えられます。しかし、平成12年4月7日に一部改正された“新栄養士法”が公布され、平成14年4月1日に施行される予定になっています。この新しい「栄養士法」では、重点が従来の「給食管理」から「傷病者の療養に必要な栄養指導」に移ります。それに伴い管理栄養士の国家試験受験資格が格段に厳しくなり、4年生大学の栄養士養成施設卒業の栄養士の場合、大きな病院での実務経験が1年以上必要になります。これまで通り、卒業後すぐ国家試験を受けられるためには、ぜひとも管理栄養士養成施設の指定を受けなければなりません。幸い、本学部栄養学科の場合教員増をせずに、比較的少ない予算措置のみで管理栄養士養成施設の認可申請の条件を満たすと思われます。上述の短大部教員の移行に合わせて、平成13年4月から指定を受けるための申請を行う方針が大学としても承認されているので、本学部としては9月に申請書を提出するべく、「管理栄養士養成施設認可申請準備委員会」と学務スタッフの市川主査を中心に現在準備を進めております。その中には、教養基礎科

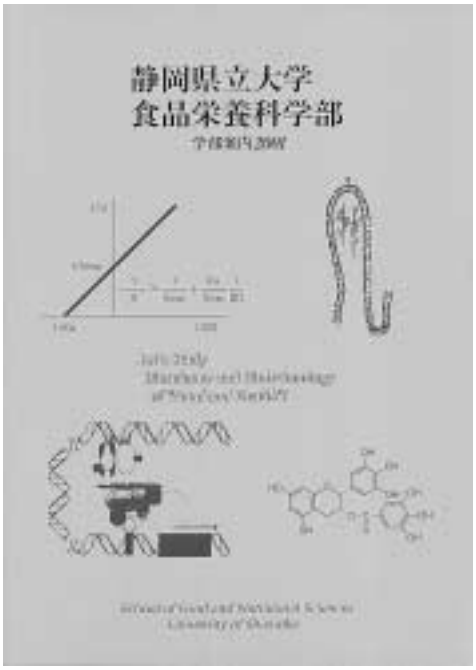
目を指定する作業が入っておりますが、これに関連して、食品栄養科学部の教員と共に全学共通科目ご担当の他学部の先生方にも、ご多忙のところ個人調書の作成をお願い致しました。各先生方のご協力に対しまして、この場をお借りして改めてお礼申し上げます。

昨年10月26日と27日の両日には、中国杭州市で第4回日中健康科学シンポジウムが開催され、本学部からも野沢教授、木苗教授が参加しましたが、これについては、“HABATAKI”Vol. 72の「薬学部の動き」の中で述べられていますので、ご覧頂ければと思います。

昨年11月18日から4日間にわたり“グランシップ”で、第4回静岡健康・長寿学術フォーラムが本学部の伊勢村教授を実行委員長として開催されました。このフォーラムの運営には食品栄養科学部の多くの教員が関わりましたが、「賢い食生活で健康長寿を目指す」をメインテーマとして、学術会議や県民フォーラムなどが開催され、成功裡に終了しました。県民フォーラムの特別講演では、アンパンマンでお馴染みの漫画家やなせたかし氏による非常に興味ある講演もありました。また、本学との協定校であるニューキャッスル大学のJ. C. Mathers 教授とフィリピン大学の C. A. Florencio 教授が、このフォーラムに講師として来静されたのを機に、本学部教員との交流会がもたれましたが、お互いの研究内容や研究・教育の組織などについて紹介しあい、大変有意義でした。

本学部の学部案内は1992年に初めて作成されましたが、それ以来マイナーな改訂はあったものの、基本的には同じスタイルが踏襲されてきました。今年は学部広報担当の中山教授の一大決心と大変なご努力の結果、全面的に改定され、新しい世紀を迎えるのに相応しい学部案内ができあがりました。これまでの白黒・B5版からカラー・A4版になり、内容も一新されました。本学部は、学部案内2001の最初の頁のタイトルにもありますように、“21世紀の「食と健康」の科学の最先端を目指して”頑張っているところです。

第４回静岡健康・長寿学術フォーラム　特別講座
「アンパンマンと健康」（やなせたかし氏）より



食品栄養科学部の新しい学部案内（表紙）

― 生活健康科学研究科の現状と最近の話題 ―

大学院生活健康科学研究科長　野呂忠敬

○生活健康科学研究科には、食品栄養科学専攻と環境物質科学専攻の2専攻が有り「食と健康、環境と健康」を研究科のキーワードとして、教育に、研究に、学生、職員共々励んでおります。

平成12年の食品栄養科学専攻のマスターコースの学生は60名で、うち外国人留学生が2名、社会人学生は0名。ドクターコースの学生は25名で、うち外国人留学生が3名、社会人学生7名であります。

一方、環境物質科学専攻のマスターコースの学生は42名で、うち外国人留学生が3名、社会人学生は1名。ドクターコースの学生は20名で、うち外国人留学生が1名、社会人学生10名であります。

研究科としては、マスターコースの学生は102名で、うち外国人留学生が5名、社人学生は1名。ドクターコースの学生は45名で、うち外国人留学生が4名、社会人学生17名。研究科全体の学生数は147名で、うち外国人留学生が9名、社会人学生18名となり、外国人留学生や社会人学生の数が年々増加しております。

○大学院の重点化・部局化、並びに、研究科担当の教員に対する任期制の導入を検討しております。

○平成12年3月終了者の就職率は、博士課程で100%、修士課程で96%となっており、個人の満足度を別にすると、良いと考えております。平成12年度の修了者にも期待をしております。

○平成11年度の「大学院最先端設備購入計画」による高分解能質量分析計が設置され、目下、調整、操作法の研修が行われております。

○大学院受験生を対象とした環境物質科学専攻の研究室公開を、平成12年6月24日㈯に10時から16時まで、環境科学研究棟で実施しました。また、食品栄養科学専攻では大学院入試説明会が、平成12年7月8日㈯に13時から17時まで、食品栄養科学部棟で実施しました。

○大学院生活健康科学研究科の内容を広報するため独自の研究科案内を作製しております。

経営情報学部の動き

経営情報学部長　小林みどり

経営情報学部は、4月に114名の新入生を迎え、2000年度がスタートした。このうちの2名は、インドネシアからと中国からの留学生である。国公立大学では初めての経営情報学部として本学部が創立されて以来、13年が経過した。この間には一般教育からの教員の移籍やカリキュラムや卒論などの大きな改革が行われたが、基本的な学部の理念は、創立以来変わることなく現在まで続いている。以下では最近1年間の学部の動きを紹介することにしよう。

1．学部組織の改革：　経営情報学部は、チャレンジを合い言葉に学部改革に果敢に取り組んでいる。今年度は学部内に2つの委員会を新設した。一つは倫理委員会である。これは大学教員の倫理保持のため、昨年度に策定した倫理要綱に基づき設置した委員会である。もう一つは学部規程整理委員会である。これは創立以来の学部の諸規定を総合的に見直し、整合的に整理するための委員会である。今年度で2年目となるカリキュラム改革委員会では、第2次カリキュラム改革に向けて議論が行われている。現在は、3年後期から卒論ゼミが始まるが、さらに、1、2年次にも少人数の基礎ゼミを導入して経営学、情報学の基礎教育を充実させること等を検討している。

2．教育活動の充実：　経営情報学部は、教育内容を充実させるため多くの努力を払っている。第1は教員シラバス検討研究会の開催である。研究会では全教員が講義の内容、目的、達成度等について発表しあい、今後の学部教育のあり方と新カリキュラムについての討論を行った。第2は、学生による授業評価の実施である。各学年終了時に無記名アンケート形式による授業評価を行い、その分析結果をカリキュラムの充実に役立てている。第3に、近年の入学試験の多様化にともない学生の資質も多様化してきているため、現在、入学後の成績追跡調査と分析を進めており、その成果については今後の教育内容の編成に反映させていくことになろう。

3．学生と教員の共同活動および交流：　経営情報学部は、学生と教員の共同活動、交流に大きな力を注いでいる。これまで学部報Challenge を年数回発行してきたが、これに加えて今年度新たに「みどりの交流会」を開催し、多数の参加を得て学生と教職員の交流を深めることができた。学生と教員の交流に情報機器を活用することは経営情報学部の大きな特徴の一つである。経営情報学部カレッ

ジホールに学部学生用コンピュータを3台設置し、常時、学生が電子メールを利用したり、学内外のホームページにアクセスできる体制が整備され、現在では、全教員、全学生がemail を使用し、mailing list による相互連絡や情報・意見の交換を行っている。さらに本学部の卒業生と学部学生の交流活動にも力を入れている。㈱ジャストシステムの築地宏次氏が「ソフトウェア開発」、SBS情報システムの大隈裕氏が「医療におけるXML」というテーマで特別講演会を行い、学部学生に大きな感銘を与えた。こうした卒業生との交流を支援するため、今年度から新たに学部卒業生名簿作成事業を開始した。

4．教員の研究及び社会的活動：　経営情報学部の教員は、多様な研究及び社会的活動を行っている。教員の研究成果についてはホームページに詳細に公表されているので重複を避けるが、それに加えて経営情報学部は、各種のプロジェクトや国、県、市町村等の審議会で委員長をつとめるなど、広く社会的に活躍する教員を多数擁している。その活動内容は、ベンチャービジネスの振興、大学における企業家教育、地方自治体における政策評価、マネジメントサイエンス、中小企業の財務情報開示とエージェント情報システムなど広範囲にわたっている。さらに経営情報学部の特筆すべき活動として、防災に対する積極的な貢献を挙げることができる。本学部教員は県主催の防災講座において危機管理論の講座を担当しているが、これに加えて防災への情報技術の応用に大きな成果を上げている。災害発生時における「被災者支援情報システム」の実験が本学部教員を含む産官学連携のもと行われたほか、「防災の日」には本学部マルチメディア研究室で開発した「インターネットを使った学生の安否情報確認システム」の試験運用が行われた。その模様は新聞、TVでも取り上げられ、大きな反響を呼んだ。

このほかにも様々な動きがあるが、紙幅の関係で割愛せざるを得ない。現在は「パートナリングの時代」と言われている。経営情報学部は他大学、高校との連携、自治体、NPO、企業との連携など、水平的、垂直的な連携をこれからも深め、社会の中で大きな役割を果たせるよう努力を続けていきたい。

名誉教授の称号授与

小松俊典
前国際関係学部教授

6月16日開催の評議会で、小松俊典前国際関係学部教授に名誉教授の称号を授与することが承認され、7月7日に授与式が行われた。

小松前教授は、昭和48年に静岡薬科大学に赴任された。爾来27年間、静岡薬科大学で一般英語、英作文、英文法、英会話を、県立大学の薬学、食品栄養科学、経営情報学部でLLによる英語教育を、国際関係学部で「オーラルコミュニケーション」と「時事英語」を、また大学院で「英語表現法」を担当され、「生きた英語」のスペシャリストとして英語教育のために献身された。英語教育の面では、県立大学創立時から13年間、LL運営委員会委員長としてLL教育の推進に尽力されると同時に、外国人教師の雇用に関し、常に外国人教師と大学当局との間に立って仲介の労をとり、実用英語の運用のために指導的役割を果たされた。

内園学長時代には、学長の諮問委員会のメンバーとして大学活性化のための答申案の作成に携わり、また星学長時代には、創立10周年記念事業実行委員会総括委員長として記念行事委員会、記念誌委員会、記念事業委員会等、各委員会の運営を司り、外国のゲストを交えた国際シンポジウムでは司会者として活躍された。

研究面では、日本の中等・高等教育における英作文教育に対する批判的提言、日本語から英語への翻訳に関する諸問題の指摘、また時代を反映する時事英語の紹介等につき数多くの英文の論文を発表され、教育現場における「生きた英語」のより良い実践を提言し続けてこられた。

社会的には、7年間にわたり静岡県中部高等学校英語教育研究会顧問として、県下の英語教育の充実と中・高英語教員のレベルアップのために、重要な役割を果たされた。

「TOKAI奨学金」授与式

株式会社TOKAI奨学金授与式が6月22日に本学応接室で行われ、3人の学生に奨学金が授与された。

TOKAI奨学金は本学の日本人学生2名、留学生1名を対象に支給され、今年度で9回目を迎えた。奨学金の募集は「情報通信の発展と市民の生活について」をテーマにした小論文で行われ、39名の応募があり審査の結果、国際関係学部国際関係学科3年の徳田美奈子さん、国際関係学部国際関係学科3年の王　昊さん、生活健康科学研究科食品栄養科学専攻博士前期課程1年の近藤章加さんが奨学生に選ばれた。奨学金は月額5万円が1年間支給される。

授与式では、株式会社TOKAIの岡野憲正常務取締役が、奨学金を友好に利用して勉学に励んでいただきたいと挨拶した。

奨学金を授与された近藤さんは、多くの人の助けで勉学を続けることをできることを感謝しているとお礼の言葉を述べた。

「富士川町静岡県立大学留学生就学奨励金」交付式

富士川町文化事業振興会が支給する就学奨励金の交付式が7月1日、富士川町中央公民館で行われた。

この就学奨励金は、本学に在学する優秀な留学生に一人年額10万円を交付し、留学生の教育・研究活動を支援するとともに、富士川町が主催する事業を通じて、留学生と富士川町民との相互の心の触れ合いを深め国際交流を図ることを目的としている。

支給にあたっては、長期にわたる留学生・富士川町民の交流を図るため、学部1年生を優先している。今年度は学部1年の留学生11名全員に支給された。

交付式では、秀村敏朗富士川町文化事業振興会長、坪内伸浩富士川町長が挨拶し、受給者を代表して、国際関係学部国際関係学科1年　杜　莹さんがお礼を述べた。

今後、留学生は富士川町民との交流会や、小中学校で行われる児童、生徒との交流会に参加して富士川町民との交流を図る予定。

「南富士産業奨学生」授与式

南富士産業株式会社奨学生授与式が7月4日本学応接室で行われた。本奨学金は、本学に在学する向学心に燃える優秀な学生に対し、学費の一部を援助することにより、国際社会、文化に貢献する人材育成の一助とすることを目的としている。今年度で4回目を迎え月額3万円が1年間支給される。

「真の国際交流とは」を論文のテーマに19名の応募があり、国際関係学部国際関係学科1年の平河　綾さんが奨学生に選ばれた。

授与式で南富士産業株式会社の杉山定久代表取締役社長は、国際社会に貢献する人に育つことを期待したいと挨拶があった。奨学金を授与された平河さんは、何事にも挑戦することを目指して、高校で1年間留学した。留学経験を活かし、この奨学金を使って大学でも留学、自分の専門分野を勉強し、国際的なNGO活動への参加や、国際ボランティアの参加により、真の国際交流に貢献したいとお礼の言葉を述べた。

「万城食品奨学生」認定式

株式会社万城食品奨学生認定式が7月4日、三島市内の株式会社万城食品本社で行われた。万城食品は昭和27年2月に創立され、加工わさびスパイスの販売を行っている。本奨学金は平成9年度に創設され、本学に在学する中国からの留学生のうち学部1年生から3年生が対象となっている。

対象学生10名から応募があり、論文審査により薬学部薬学科1年の劉　凱さんが奨学生に認定された。奨学金は月額5万円が1年間支給される。

認定式では株式会社万城食品の米山　寛代表取締役が挨拶し、認定書授与後奨学生と歓談した。

「静岡朝日テレビ奨学生」認定式

株式会社静岡朝日テレビ奨学生認定式が7月5日、本学応接室で行われた。本奨学金は静岡朝日テレビの開局15周年と社名変更を記念して、平成5年末に静岡大、県立大に在籍する外国人留学生向けに制度が設けられ、平成6年度から支給が開始された。平成7年度からは浜松医科大学の留学生も対象に加えられた。平成12年度は3大学で6名が奨学生に採用され月額3万円の奨学金が1年間支給される。

「日本で何を学び、将来どのように役立てたいか」をテーマに本学から12名が応募し、本学では国際関係学部国際言語文化学科2年の王　孝傑さん、生活健康科学研究科環境物質科学専攻博士前期1年の盧　少波さんが奨学生に採用された。

認定式では、静岡朝日テレビの笹井輝雄代表取締役社長が、本奨学金が外国人留学生の勉学の手助けになることを願っていると挨拶した。

奨学生採用通知を授与された盧さんは、奨学金を大切に使い、日本で学んだ知識を祖国に持ちかえり祖国の環境事業に役立てたいとお礼の言葉を述べた。

「駿河精機奨学生」授与式

駿河精機株式会社奨学生授与式が７月１２日、本学応接室で行われた。駿河精機は経営理念の≪天意創造≫のもとに地域に密着した企業を目指しており、人材開発の一環として奨学金制度を設け、今回が５回目の授与式となる。奨学金は月額５万円が１年間支給される。

「人生で感動したこと」を論文テーマに４４名の応募があり、国際関係学部国際言語文化学科３年の佐脇千晴さん、国際関係学研究科比較文化専攻修士１年の朴　玉姫さんが採用された。

認定式では、駿河精機株式会社の望月信行取締役管理部長ほか関係者が出席した。奨学金を授与された佐脇さんは、この夏に海外語学研修に参加し、その経験を活かし異文化コミュニケーションをより深く学び、将来は英語の教員となりコミュニケーション・ギャップの理解を深められるような指導をしたいと夢を語り、奨学金が大きな支えになるとお礼を述べた。朴さんも修士課程で、日本における倫理、道徳教育が青少年の人間形成にどの様な役割を果たしているかテーマとして研究を進めており、日本で修得した学問を２１世紀を担う韓国の若者たちに教示し共に学び、研究したい、奨学金による支援に感謝するとお礼の言葉を述べた。

「静清信用金庫奨学生」授与式

静清信用金庫奨学生授与式が7月13日、静岡市の静清信用金庫本社にて行われた。本奨学金は地域に生きる静清信用金庫の基本方針に従い、次代を担う人材育成に関与するため設立された。奨学金は本学の学生のうち学部1年生から3年生を対象としており、月額3万円が1年間支給される。

審査は3つのテーマ「企業に対する要望、社会構造の変化に伴う金融機関の対応、インターネットバンキング・モバイルバイキングの今後の可能性について」により論文を募集し行われ、国際関係学部国際言語文化学科3年の王　恵英さん、経営情報学部経営情報学科3年の松澤　梢さんの2名が認定された。

授与式では、静清信用金庫の高橋　晋理事長が挨拶し、2名の学生に奨学生認定書が授与された。

「日産カーリース静岡奨学金」授与式

日産カーリース静岡株式会社奨学金授与式が7月17日に、本学応接室で行われた。本奨学金は本学に在学する全学生を対象とし、平成11年度に設けられたもので本年度で2回目となる。

奨学金は月額3万円が1年間支給される。

「レンタカー」をテーマにした論文募集に10名が応募し、生活健康科学研究科食品栄養科学専攻2年の戸塚　鐘さんが採用された。

授与式は日産カーリース静岡株式会社の和田泰治取締役社長他関係者が出席し行われた。奨学生の戸塚さんは植物の光合成の研究をテーマとする研究室に在籍している。植物の光合成能力を改良、向上させることによって、食糧生産の向上と大気中の二酸化炭素の固定能力の増強を通じて地球の

温暖化防止等を最終目標として日々の研究を続けている。この奨学生に選んで頂いた期待に添えるよう研究に勉強を励みたいとお礼の言葉を述べた。

「天野回漕店奨学生」認定書授与式

株式会社天野回漕店奨学生認定書授与式が７月２７日に、本学応接室で行われた。天野回漕店は「共存共栄」を経営理念の一つに掲げ、地域社会の発展に努力しており、地元静岡県にて勉学する学生の奨学勉励の一助に寄与するべく、平成７年から奨学金制度を開始した。今年度で６回目を迎える本奨学金は月額３万円が１年間支給される。

奨学金募集は「清水を活性化する為に港の果たす役割とは」、「清水港が国内外の港間競争を勝ち抜く為には」、「清水港を活かした町づくりとは何か」を論文のテーマとして行われ、９名が応募、薬学部製薬学科１年の桑原陽太さん、食品栄養科学部栄養学科３年の中島理絵さん、国際関係学部国際言語文化学科２年の酒井美穂さんが認定された。

授与式では、株式会社天野回漕店の小松信介取締役社長が、会社は清水に生まれ清水に育てられ

今年で創業以来２００年を迎えた、奨学金が地域のためになることを期待すると挨拶した。

認定書を授与された桑原さんは、薬学部で４ヶ月間勉強し薬学奥深さを感じた、将来は遺伝子分野の研究をしたい、中島さんは管理栄養士を目指している、疾病予防のための栄養学を勉強したい、酒井さんは国際援助、国際支援について学んでいきたいと抱負を述べた。

受 賞

大学院博士課程3年生黒羽子君 日本生化学会中部支部奨励賞に受賞

はばたき72号に掲載されたように日本生化学会中部支部会長である本学鈴木康夫薬学部長のもとで、去る5月13日㈯に第64回日本生化学会中部支部例会が本学にて開催され、本学からも多くの演題発表がなされた。本学薬学部博士課程3年（放射薬品学・奥教授研究室）の黒羽子孝太君は「Dorsal Air Sac法を用いた腫瘍新生血管に与える光線力学的療法（PDT）の影響」という演題でポスター発表した。光線力学的療法は、がん部位に集積した光感受性薬剤をレーザー照射により励起する方法で、レーザー照射されない正常部位には副作用を示さないがん治療法として注目されている。黒羽子君は光感受性薬剤の投与法とレーザー照射の時間をうまくコントロールすることで、がんそのものではなくがんに栄養を補給するための新生血管を傷害することにより、効率的にがん治療が行えることを示した。黒羽子君の研究成果は種々のがんに有効で副作用の少ない治療法の開発に結びつくものと高く評価され、参加者による投票の結果、参加者の圧倒的な支持により本年度の日本生化学会中部支部奨励賞に選ばれた。なお授賞式は同日の総会において執り行われた。

大学院博士課程2年　浅井君 がん転移研究会総会でプレゼンテーション賞を受賞

去る6月29、30日に大阪で開催された第9回がん転移研究会総会において、本学薬学部博士課程2年の浅井知浩君（放射薬品学・奥教授研究室）は「腫瘍休眠活性を有する新規腫瘍新生血管特異的ペプチドの探索」という演題で口頭発表したが、その発表に対しプレゼンテーション賞（助教授以下の若手研究者が対象）が贈呈された。プレゼンテーション賞は午前または午後に1会場1名であるが、大学院生の受賞は快挙である。なお浅井君は第7回国際リポソーム会議（開催地　カリフォルニア州ナパ）のポスター優秀賞に次いで今年度2度目の受賞となった。

人 事

採　用

7月１日付け

杉山　千歳

環境科学研究所助手（反応化学研究室）

研究助成の採択

財団法人　医薬資源研究振興会　研究奨励金

「ライム病ボレリア病原分子としてのスフィンゴ糖脂質結合蛋白質の機能とワクチンへの応用」

増澤俊幸　薬学部　助教授

第20回財団法人薬学研究奨励財団海外派遣補助金

「第20回ダイオキシン関連環境汚染物質国際シンポジウム」への出席補助金

薬学部　薬剤学教室　加藤善久

新刊案内

本学関係者著書紹介　●東郷　吉男　著　（本学名誉教授　元国際関係学部教授）

「４字熟語辞典」　東京堂出版　5月30日発行

●西田ひろ子　著　（国際関係学部教授）

「人間の行動原理に基いた異文化間コミュニケーション」　創元社

目次

序　章　異文化間コミュニケーションとは
第１章　これまでの異文化間コミュニケーション研究
第２章　コミュニケーション行動研究の源流
第３章　行動主義的アプローチへの批判
第４章　認知理論の台頭
第５章　スキーマ理論
第６章　文化的行動様式の獲得
第７章　異文化間コミュニケーション行動の認知的基盤
第８章　文化スキーマ分析
第９章　異文化間コミュニケーション研究の再考察
終　章　異文化間コミュニケーションとはどのような現象なのか

●西田ひろ子　編　（国際関係学部教授）

「異文化コミュニケーション入門」　創元社

目次

第１部　異文化間コミュニケーションに影響を与える要因
　第１章　言語と会話スタイル
　第２章　非言語
　第３章　心理的要因
　第４章　価値観
第２部　異文化間コミュニケーション行動のメカニズム
　第５章　異文化集団間におけるコミュニケーション理論
　第６章　脳と人間のコミュニケーション行動との関係
第３部　異文化間コミュニケーションの実践・応用
　第７章　組織内異文化間コミュニケーション
　第８章　異文化間コミュニケーション教育と研修

Books information

静岡県立大学学生文芸コンクール、スピーチコンテスト開催

はばたき寄金では、学生文芸コンクール、学生スピーチコンテストを実施します。
作品募集、参加者募集は次のとおりです。（詳細は学内に掲示してあるポスターをご覧下さい。）

1【学生文芸コンクール】

⑴文芸部門　①短編小説　400字詰め原稿用紙20枚以上
②短歌　10首
③俳句　10句
④紀行文　400字詰め原稿用紙10枚以内
⑤詩　自由

⑵評論部門　①指定課題『魅力ある大学とは』　400字詰め原稿用紙5枚以上
②自由課題　400字詰め原稿用紙10枚以内

2【学生スピーチコンテスト（発表日、11月3日㈮）】

⑴日本人学生の部『21世紀の日本の役割』　英語　5分以内
⑵留学生の部　『21世紀の日本への期待』　日本語　5分以内
～募集期間内に原稿、カセットテープを提出

3【応募資格】　静岡県立大学の全学生・研究生

4【募集期間】　平成12年9月1日㈮～平成12年10月13日㈮

5【賞及び賞品】　最優秀賞　賞状と副賞　図書券または商品券5万円分
その他優秀賞、参加賞等があります。

6【応募・問い合わせ先】

事務局総務課企画スタッフ（管理棟2階）　電話　０５４－２６４－５１０３

はばたき寄金からのお知らせ

7月末現在の寄金残額　４，３７９，３２０円

［前号以降の寄付金者（教職員敬称略）］　寄付金総額　３０４，０００円

○教職員　（薬学部）辻邦郎
（食品栄養科学部）伊勢村護　竹石桂一　匿名希望者（1名）
（国際関係学部）小谷野俊夫　匿名希望者（1名）
（経営情報学部）教職員一同
（看護学部）木村忠直　新田静江　矢野正子
（環境科学研究所）相馬光之　野呂忠敬
（事務局・学生部）石田進　海野英子　小笠原暢久　小出和美
匿名希望者（1名）

○学　外　大石紀子様（静岡女子短期大学卒　清水市）

（担当　事務局企画スタッフ　TEL５１０３）

第14回　静岡県立大学
公　開　講　座

1　講義日程とテーマ

静岡会場１　県立大学環境科学研究所大講義室　　テーマ：環境ホルモン

①10月14日㈯	環境ホルモンはどのように我々の未来を奪うのか？	環境科学研究所　教　授　富田多嘉子
②10月21日㈯	身近なものの環境ホルモンをはかる	環境科学研究所　助　手　大浦　健
③10月28日㈯	環境ホルモンと戦うからだ　－脳が危ない－	環境科学研究所　助　手　斎藤貴江子
④11月11日㈯	環境ホルモンの発生とその環境中への拡がり	環境科学研究所　助教授　雨谷　敬史

静岡会場２　県立大学小講堂　　テーマ：がん予防の最先端

①10月14日㈯	植物性食品を上手に摂ろう	食品栄養科学部　学内講師　下位香代子
②10月28日㈯	ピロリ菌の病原性	食品栄養科学部　教　授　野澤　龍嗣
③11月11日㈯	食事でがんを防ぐ	食品栄養科学部　教　授　伊勢村　護
④11月25日㈯	がんと遺伝子変異	千葉大学薬学部　教　授　山口　直人 （前県立大学薬学部助教授）
⑤11月25日㈯	がんになりやすい人、なりにくい人	薬学部　教　授　出川　雅邦

三島会場　静岡県教育委員会三島分館　　テーマ：現代社会と生き生きライフ

①10月14日㈯	寝たきりにならない・させない生活術	看護学部　講　師　山田紀代美
②10月21日㈯	病苦からの解放・癒しと破壊的カルトの流行	看護学部　講　師　西田　公昭
③10月28日㈯	生活習慣病を予防する	看護学部　教　授　木村　正人
④11月11日㈯	日常生活における感染予防 －インフルエンザの予防を中心に－	看護学部　教　授　土井まつ子

浜松会場　短期大学部浜松校45番教室　　テーマ：21世紀のコミュニケーション

①10月７日㈯	対人コミュニケーションの心理学 －伝えること、伝わるもの－	短大部浜松校　講　師　福岡　欣治
②10月14日㈯	異文化間コミュニケーションの問題 －日本文化の海外受容に関して－	短大部浜松校　講　師　石川慎一郎
③10月21日㈯	English and the Borderless World （ボーダーレス世界と英語）日本語解説	短大部浜松校　教　授　S.J.ウィレット 短大部浜松校　助教授　鈴木　元子
④10月28日㈯	組織とコミュニケーション	短大部浜松校　教　授　中村　健壽

小鹿会場　短期大学部看護実習室　　テーマ：自分でできる健康管理

①10月14日㈯	日常生活と血圧　－血圧を測ってみよう－	短期大学部　講　師　三輪木君子
②10月21日㈯	生活習慣病にならないための健康管理 －運動障害の予防－	短期大学部　助教授　牧野　典子
③10月21日㈯	自分でできる健康管理 －生活習慣病・肥満を考える－	短期大学部　講　師　塚本　康子
④10月21日㈯	塩味と減塩　－食物と尿の塩分測定－	短期大学部　講　師　坂本　知子
⑤10月28日㈯	糖尿病の予防　－血糖値の測定とグループワーク－	短期大学部　助教授　深江　久代 短期大学部　講　師　三輪眞知子

2　講義時間

午後1時30分から3時30分までの2時間です。

ただし、小鹿会場は午後1時30分から4時30分までの3時間です。

3　会場別定員等

会　　場	定　　員	受講対象
静岡会場１	８０人	高校生以上
静岡会場２	２００人	高校生以上
三 島 会 場	１５０人	高校生以上
浜 松 会 場	２００人	高校生以上
小 鹿 会 場	６０人	１５歳以上

4　申込先

静岡会場１、静岡会場２、三島会場
　　静岡県立大学公開講座担当　〒422-8526　静岡市谷田52番1号　TEL（054）264－5008
浜松会場　　静岡県立大学短期大学部浜松校公開講座担当
　　〒432-8012　浜松市布橋3丁目2－3　TEL（053）454－4486
小鹿会場　　静岡県立大学短期大学部公開講座担当
　　〒422-8021　静岡市小鹿2丁目2－1　TEL（054）202－2610

5　申込み方法

往復はがきに、「住所、氏名、年齢、電話番号、希望テーマ名」を御記入の上、上記まで申し込んでください。応募者多数の場合は抽選とさせていただきます。なお、小鹿会場は実技があります。

6　受講料　無　料

7　受付期間

平成12年9月1日から平成12年9月14日まで（必着）

谷田風土記 65

『幻の日本平音頭』

県立大学がある所は言うまでもなく、有度山麓であるが、この有度山を別名『日本平』というのも周知のとうりであるが、ここは『新日本観光百選』第一位に選ばれ、より有名となった。日本平は、日本武尊（ヤマトタケルノミコト）に由来する。これにちなんで、山頂には『ヤマトタケル』の立像がある。

さて、この新観光百選首位に選ばれたのを記念して、『日本平音頭』がつくられ、なんと駆け出し時代の島倉千代子が歌っていたのである。

島倉千代子とコロンビアローズ歌う

池田誠一郎作詞、岩瀬ひろし作曲で、歌は彼女とともに伊東満のふたりで歌っている。コロンビアレコードから発売された。

B面は、『春を呼ぶ日本平』でコロンビアローズが歌っている。

しかし、この歌のことを知る人は、いま殆ど無く、幻のレコードと言われているが、歌詞は、このあたりを歌いこんだもので、なかなか面白い内容である。沖の白帆というあたりに時代が感じられよう。

≪日本平音頭≫

一　ハァ～
　花のカードを　茶摘みの空へ　撒いて燕の宙返り
　富士も微笑む　ちゃっきり節の
　唄でくるくる　旅のバス　ソレ
　～叩く太鼓も　たんたんだいら
　～日本平は　日本一　ササ　日本一

ニ　ハァ～
　沖の白帆も　かもめの宿も　夢をたのしく駿河湾
　三保の松原　天女の笛が
　今も聞こえる　蝉しぐれ　ソレ

（なおこの音頭のテープを希望者にさしあげます。）

（国際関係学部教授・高木　桂蔵）

ベニーK.G.テン博士に客員教授称号附与

静岡県立大学環境科学研究所は、国土保全研究所ニュージーランド有限会社（元ニュージーランド科学産業研究省土壌局）に勤務するベニーK.G.テン博士（同会社の科学研究員、研究プログラムリーダー）を日本学術振興会外国人招聘研究者として受け入れ、「酸性条件下での土壌過程における粘土と有機物の役割」について、相馬環境科学研究所長と共同研究を行うことになった。

テン博士は、土壌科学分野の世界的権威であり、1974年の粘土鉱物と有機化合物の相互作用に関する古典的な名著に対するアダムヒルガー科学著作賞の受賞、ニュージーランド王立協会フェロー、ニュージーランド土壌科学会フェロー就任など、

その経歴は輝かしいものがある。

環境科学研究所での受け入れ期間は、平成12年6月24日から平成13年3月31日までの予定で、受け入れ期間中は、客員教授の称号を附与することが5月26日開催の評議会で承認された。

池谷直樹静岡大助教授に客員助教授称号附与

静岡県立大学生活健康科学研究科の熊谷裕通助教授と、静岡大学保健管理センターの池谷直樹助教授は、「慢性腎疾患の予防と対策」をテーマに共同研究を行うこととなった。

池谷助教授は、米国ユタ大学腎臓内科研究員、浜松医科大学附属病院第一内科助手、総合病院聖隷浜松病院腎臓内科主任医長を経て、現在静岡大学保健管理センター助教授を務めている。

生活健康科学研究科の臨床栄養学研究室では、これまで慢性腎不全を中心とした慢性腎疾患の予防と治療に関する研究に、主として栄養学的な面から取り組んできたが、池谷助教授は腎病理学の専門家であり、形態学的見地から共同研究を進める予定である。また、静岡県の腎疾患患者のデー

タベース化にも共同で取り組む予定である。

共同研究の期間は平成12年8月1日から平成16年3月31日までの予定で、期間中は、客員助教授の称号を附与することが7月21日開催の評議会で承認された。

学内ニュース「はばたき」への掲載について

教員の新刊案内、受賞、研究助成への採択、学会開催などの教職員関係のニュースや投稿を歓迎します。
掲載希望がありましたら、事務局企画・情報スタッフ（管理棟２階）あてに原稿をお寄せください。

企画・編集　静岡県立大学企画情報スタッフ　TEL 054－264－5103　E-mail：kijo4@gm.u-shizuoka-ken. ac. jp